

学位論文要約
村上春樹文学と魔術的リアリズム

DALMI KATALIN

序章 本論の目的と研究上の位置

近年ノーベル文学賞の候補者として名前が上がっており、国際メディアからも注目されるようになった村上春樹（1949年～）の文学については、日本国内だけではなく、海外でも多様な研究が行われてきた。例えば、論者の出身国であるハンガリーを含む欧米圏では、幻想的な要素に富んだ村上春樹文学は日本を代表する「魔術的リアリズム」として紹介されてきた。一方で、日本では村上春樹文学を「魔術的リアリズム」と結びつけて論じる研究は極めて少なく、日本文学研究においては「魔術的リアリズム」という用語さえあまり知られていない。したがって、本論では、欧米圏と日本における村上春樹文学の受容に見られる以上のような相違を踏まえ、村上春樹文学について、魔術的リアリズムをキーワードにしながら論じた。具体的には、本論で次の質問に対する回答を探ることを目的とした。

そもそも魔術的リアリズムとは何か。村上春樹文学は魔術的リアリズム文学として捉えられるのか。そうであれば、村上春樹文学における魔術的リアリズムは、ラテンアメリカ文学における魔術的リアリズムと同一視可能なものだろうか。

なお、村上春樹文学に見られる魔術的リアリズムの手法については、主に欧米出身の研究者を中心に、これまでも論じられてきた。しかし、村上春樹文学に対して、魔術的リアリズムという用語がなぜ欧米圏を中心に用いられており、日本（アジア圏）ではあまり使用されてこなかったのかということ、つまりテキストと読み手の関係をめぐる研究は十分だと言い難い。従って、本研究では最終的に、魔術的リアリズムに内包されている視点の問題に着目し、テキストと読み手の関係についても考察を行った。

序章においては、本研究の動機と目的について述べ、日本及び海外、とりわけ英語圏とハンガリーにおける村上春樹文学の受容を確認し、先行研究の整理を行った。その上で本研究の意義を確認し、本論の構成についてまとめた。各章の概要は以下の通りである。

第I部 魔術的リアリズムについて

第1章 魔術的リアリズムの歴史—ヨーロッパの絵画から世界文学へ—

本章においては、ヴァイマル共和国時代のドイツの美術評論まで遡り、魔術的リアリズムの歴史を辿った。魔術的リアリズムは、ヨーロッパの美術、主に絵画における新しい傾向を指す表現として1920年代のドイツで出現したと考えられる。そのため、本章ではまず、ドイツ出身の美術評論家フランツ・ロー（Franz Roh, 1890～1965年）が1925年のエッセイにおいて提唱した「マジッシャーレアリスムス」（Magischer Realismus）について、ヨーロッパの絵画を中心に概説した。ローのエッセイは当時パリで活躍していたラテンアメリカ出身の作家たちの創作活動にも影響を及ぼした結果、魔術的リアリズムという概念が次第に、文学作品に対して用いられるようになった。本章の後半では、「驚異的現実論」を提唱したキューバ出身のアレホ・カールペンティエ

ル (Alejo Carpentier、1904～1980 年) を中心に魔術的リアリズム文学の先駆者たちの紹介を踏まえ、魔術的リアリズムの世界中の普及に多大な影響を与えたコロンビア出身のガブリエル・ガルシア＝マルケス (Gabriel García Márquez、1927～2014 年) と彼の代表作として知られている『百年の孤独』(Cien años de soledad、1967 年) について概説した。最後に、世界文学における魔術的リアリズムの発展に着目し、魔術的リアリズムをめぐる名称の整理を行った。

第 2 章 魔術的リアリズムをめぐる学説の整理とその特徴

「魔術的リアリズム」という言葉は、特に欧米の文学批評において頻繁に用いられているにも関わらず、魔術的リアリズムの明快な定義は未だに存在していない。そのため、本章においては、魔術的リアリズムに関する主な学説を整理し、魔術的リアリズムの特徴についてまとめた。具体的には、1950～60 年代における早期の魔術的リアリズム論まで遡り、幻想文学との比較を出発点とした 1970～80 年代の学説を経て、魔術的リアリズムをポストモダン文学の枠内で捉えた 1990 年代以降の学説に着目した。

なお、先行研究を踏まえ、魔術的リアリズムの主な特徴を〈日常対非日常〉という二項対立の破壊、非日常的な視点の拡大、及び幻想的な要素の使用と作者の貢献という三点にまとめ、本論で用いる魔術的リアリズムに対する定義を確認した。本論では、魔術的リアリズムをラテンアメリカ文学に限定せず、現実的な要素と非現実的な要素を混合させ、合理主義を離れた視点から現実を捉え直す語り的手法として捉えた。

第 II 部 村上春樹の短編小説に見る魔術的リアリズム

第 3 章 「踊る小人」論—「踊る小人」に見る 1980 年代の日本—

本章では、ラテンアメリカ文学の影響が既に指摘されてきた「踊る小人」(『新潮』、1984 年 1 月号) を取り上げ、テキストにおける架空世界とテキスト外の現実との関係について述べた。

まず、語り手の異常とされている視点と現実の照射について考察を行った上で、テキストにおける「象工場」を敗戦後の日本における大量生産、「象の水増し」を消費社会における「個性」の大量生産のパロディーとして解釈した。よって、主に「ハイ・ファンタジー」として捉えられてきた「踊る小人」は、実は現実から完全に切り離された物語ではないことを確認し、テキストにおける魔術的リアリズムの手法は、1980 年代の高度資本主義社会の不条理な側面を描くためのツールとして機能していると結論付けた。

第 4 章 「TVピープル」論—「マジック」の起源としてのメディア—

本章では、1989 年 6 月号の『par AVION』に掲載された「TVピープル」について考察を行った。本作品の主人公がガルシア＝マルケスの小説を読んでいる設定は、ガルシア＝マルケスへのオマージュだと考えられるが、物語世界はガルシア＝マルケスの作品世界とは根本的に異なっている。そのため、本章では、「僕」の語りと視点の変化を分析し、テキストにおける魔術の起源を探った。

具体的にはまず、魔術的リアリズムの手法とテキストにおける二項対立の崩壊に着目し、現実と非現実の融合は、「僕」の語り及びテキストの形式によって更に強調されていることを指摘した。

それから、テキストにおけるマスメディアの描写に焦点を当て、本作品は日本の消費社会の〈吸収力〉とそれを支えているマスメディアの力を描いていると述べ、本作品におけるマジックの起源は、メディアによって支配されている情報社会の狂気にあると論じた。

第5章 「タイランド」論—魔術的リアリズムと〈^{イメージ}像〉の世界をめぐる—

本章においては、1999年11月号の『新潮』に掲載され、連作短編集『神の子どもたちはみな踊る』（新潮社、2000年）に収録されている「タイランド」に着目した。

まず、言語の混在による舞台の虚構化を分析し、過去の記憶の表象として捉えられる象が自由に歩き回っている〈タイランド〉は、主人公の内界を具現化する魔術的な空間であると指摘した。その上で、テキストにおける地震の描き方と主人公の意識における変化について検討し、主人公が過去のトラウマを如何に乗り越えていくのかについて考察を行った。

「タイランド」という魔術的な空間においては、主人公を苦しめている過去の記憶は、夢や彼女の体に入っている石として具現化し、可視化される。そして、主人公は「タイランド」を旅し、過去の暴力的な記憶と向き合うだけではなく、それを乗り越えるために必要としている新しい物語を手に入れて現実世界に戻っていく。本章の後半においてはこの展開を踏まえ、物語の更新による主人公の回復を描いた本作品は、村上春樹が1995年以降に見出した作家としての使命、つまり麻原彰彰が作り上げた悪質な物語を放逐できる力を持つ物語を提供しなければならないという使命感を反映した作品だと論じた。なお、本作品における魔術的リアリズムは、災害によって人々の内界における変化を可視化させるための手法であると指摘した。

第Ⅲ部 村上春樹の長編小説に見る魔術的リアリズム

第6章 『ねじまき鳥クロニクル』論—魔術的リアリズムと歴史の描写—

本章では、1994～95年に新潮社から刊行された『ねじまき鳥クロニクル』を中心に、魔術的リアリズムの手法と歴史の描写について論じた。

まず、第1部「泥棒かささぎ編」と第2部「予言する鳥編」（1994年）における歴史の描写に着目し、本作品における魔術的リアリズムは、歴史を他者との繋がりを可能とする神秘的な力の源泉として描く手法であると指摘した。それから、第3部「鳥刺し男編」（1995年）における「仮縫い」という神秘的な治療と歴史の虚構化に着目しながら、本作品と魔術的リアリズム文学、とりわけ『百年の孤独』における歴史描写との類似性を指摘した。『ねじまき鳥クロニクル』においては、外部の支配者対内部の被支配者という、魔術的リアリズム文学によく見られる構図がシステム対個人という、内部をめぐる問題に置き換えられているが、歴史の虚構化は公的歴史批判に繋がる点においては、魔術的リアリズム文学と類似性を持っていると論じた。なお、『百年の孤独』に通じる村上春樹の歴史描写は、歴史の回避ではなく、忘れられた歴史を読者に有効に伝える方法として評価できると指摘した。

第7章 『海辺のカフカ』論—魔術的リアリズムとネオ・シャーマニズム—

本章においては、2002年に新潮社から刊行された『海辺のカフカ』を取り上げ、トラウマと魂の回復という主題に着目しながら、魔術的リアリズムの手法とネオ・シャーマニズムの関係につ

いて論じた。

前近代的な世界との交流を可能とする言語的パフォーマンスとして捉えられる魔術的リアリズムのテキストは、合理的な手法では癒すことができない歴史的・文化的なトラウマを癒すための有効なナラティブとして機能を果たしていると考えられる。(Wendy B. Faris, *Ordinary Enchantments: Magical Realism and the Remystification of Narrative*, Vanderbilt University Press, 2004.) この指摘を踏まえ、本章ではまず、奇数章の主人公であるカフカの四国への旅について、シャーマニズムとの類似性を指摘しながら論じた。具体的には、前近代的な物語空間に形而上的な旅をして魂の回復を得て現実社会に戻っていくカフカの形而上的な旅は、シャーマニズムにおける異界往還を想起させている一方で、読者にとってはプレモダンな世界と交流する場を与えており、ネオ・シャーマニズムにおけるヒーリングと同様な役割を果たしている指摘した。

本章の後半においては、偶数章の主人公ナカタさんと佐伯さんが経験した幽体離脱の歴史的コンテキストに着目した。そして、戦争を人間の魂を決定的に傷つけるものとして描かれている本作品は、歴史的なトラウマに対する癒しを提供しない一方で、歴史に対する普遍的な批判性を持っていると論じた。

第 8 章 『騎士団長殺し』論—「マギッシェアリスムス」との関連性と「アンシュルス」のモチーフを中心に—

本章では、新潮社から 2017 年に刊行された『騎士団長殺し』を取り上げ、魔術的リアリズムによる作者の貢献についてヨーロッパ人読者の視点から論じた。

まず、「騎士団長殺し」をはじめ、本作品に登場する絵画とフランツ・ローが提唱したマギッシェアリスムスの関係について分析し、絵を見る／絵を描く行為による悪の描写について論じた。肖像画を専門にしている画家である主人公が、モーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』から主題を借りた「騎士団長殺し」という絵画を発見し、それをデッサンすることによって、自分自身の中に影を潜めている悪と暴力性を発見していく。この展開を踏まえ、『騎士団長殺し』は村上春樹が「ハンス・クリスチャン・アンデルセン文学賞」の授賞式において自らの影との対峙の必然性について行ったスピーチと呼応していることを指摘した。

本章の後半においては、作中に繰り返し登場する「アンシュルス」のモチーフと悪の描写について論じた。第 1 部の末尾にはサムエル・ヴィレンベルク (Samuel Willenberg, 1923~2016 年) のノンフィクション『トレ布林カの反乱』(*Revolt in Treblinka*, 1988 年) からの引用文が挿入されていることによって、『騎士団長殺し』における悪の背景には、ホロコーストなど、第二次世界大戦における巨大な暴力の影が偏在していることが窺える。本章では、テキストにおけるヨーロッパの歴史に関する言及と悪の描写を踏まえ、自分の暴力的な影と対峙することの必然性を描いた『騎士団長殺し』は、他者の暴力性のみ主張し、過去の危険なレトリックを繰り返しているヨーロッパ諸国を意識して書かれた作品であると指摘した。

終章 村上春樹文学と魔術的リアリズム

本論で明らかになったのは、村上春樹文学における魔術的リアリズムの手法が変化を見せていることである。1980 年代から 1990 年代前半の間に書かれた村上春樹文学における魔術的リアリ

ズムの手法は、個人を圧倒する消費社会や高度資本主義社会に内包されている不条理を描き、読者にとって現実を見る新たな視点を提供するツールとして捉えられることである。それに対し、「コミットメント」が強調されている 1995 年以降の村上春樹文学においては、歴史に関する描写が増えてきたにも関わらず、重点は個人的トラウマの克服と魂を癒す物語の発見に置かれ、魔術的リアリズムの手法は人間の無意識をプロットする手法として機能を果たすようになった。

従って、魔術的リアリズムの本質が、読者に現実を見る新たな視点を与えることを目指している作者の社会貢献であるとすれば、村上春樹を純粋な「魔術的リアリズム作家」として捉えることには留意が必要であると指摘した。すなわち、村上春樹文学、とりわけ 1995 年以降に書かれた作品は魔術的リアリズム文学として捉えられるかどうかの問題は、作者の内向的なコミットメントをどのように評価するのかの問題に繋がる。本論では、テキストにおける幻想的な要素の使用が、読者に現実を見る新たな視点を与える機能を果たすのであれば、ラテンアメリカで発展してきた魔術的リアリズムとは異なっているとしても、テキストを魔術的リアリズム文学として見做すことは可能だと結論付けた。

最後に、魔術的リアリズムに内包されている視点の問題と欧米圏における村上春樹文学の受容の関係について論じ、欧米圏において村上春樹が魔術的リアリズムとして読まれていることの背景には、読者の日本に対するオリエンタリズムがあると述べた。